

2016年11月1日

株式会社ブイ・エム・アイ総研

## 「活・人・経・営」コラム第59回

### <AIがひらくイノベーションの未来>

AI（人工知能）が、20年ほど前にチェスで世界のトッププロに勝ってから、昨年は将棋で日本のプロの高段者に勝ち、今年はまだ先と思われていた囲碁でも世界的なレベルのプロを負かしてしまいました。そのほかの分野でも、大企業だけでなくベンチャー企業もAIの開発に続々と参入してきています。背景にはITの急速な進歩が、ビッグデータの活用領域を広げていることなどが考えられます。

AIの特許出願件数に視点を当てますと、米国が断トツ首位を走っていて、最近数年では中国が日本や他の国々を大きく引き離し、米国を猛追しています。日本企業もこれらの現実を認識し、さまざまなイノベーションの創出を見すえて、AIの関連市場に参入しつつあります。

一方でAIの持つ負の側面もあり、これらを乗り越えて人類の新しい未来を開いて欲しいと願うばかりです。

### <未来組織のあり方>

企業その他ほとんどあらゆる組織が、自らの組織構造について実験し、提携やパートナーシップ、あるいは合弁のあり方について試行し、トップマネジメントの構造と役割について見直しを行うべきときがきている。グローバル企業においては、世界展開と製品多角化について新しいモデルを検討することが必要となっている。集中と多角化のバランスについて新しいモデルが必要となっている。

— 出典：「ネクスト・ソサエティ」P.F.ドラッカー著（上田惇生訳）—